

二国間交流事業 共同研究報告書

令和5年4月10日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]
金沢大学・古代文明・文化資源学研究所
[職・氏名]
特任准教授・上杉彰紀
[課題番号]
JPJSBP 120219913

1. 事業名 相手国: オーストリア (振興会対応機関: OP) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) アラビア内陸乾燥域・青銅器時代における都市形成と遊牧民社会の関係

(英文) Relationship Between Urban Development and Pastoral Society in the Inner Arid Area of the Arabian Peninsula during the Bronze Age

3. 共同研究実施期間 令和3年4月1日 ～ 令和5年3月31日 (2年0ヶ月)【延長前】 年 月 日 ～ 年 月 日 (年 ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Department of Prehistoric and Historical Archaeology, University of Vienna・
Associate Professor・LUCIANI, Marta

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		3,753,450 円
内訳	1年度目執行経費	1,864,850 円
	2年度目執行経費	1,888,600 円
	3年度目執行経費	- 円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	7 名
相手国側参加者等	1 名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	0	1	()
2年度目	1	2	()
3年度目			()

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣:委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入:相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流の概要・成果等

(1)研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

本研究は、青銅器時代のアラビア半島北西部内陸乾燥域における都市定住民と遊牧民の関係を明らかにすることを目的としたものである。具体的にはサウジアラビア、タブーク州に所在するグレイヤ遺跡を調査対象とし、この都市遺跡周辺の地形・水利環境の分析により、都市定住民を支えた食糧生産体制を明らかにするとともに、後背の丘陵地帯に展開した遊牧民遺跡との比較をもとに、都市の成立・展開過程における都市定住民と遊牧民の関係を考察しようとするものである。

令和 3・4 年度の事業により、相手国側代表者マルタ・ルチアーニと共同で、グレイヤ遺跡周辺(2200 ヘクタール)の地形測量を行い(出張期間:令和 3 年 9 月 10 日～10 月 4 日、令和 4 年 10 月 20 日～11 月 19 日)、この遺跡の地形環境を詳細に記録した。その結果として、遺跡内外の水利環境の復元に大きなデータを得るとともに、都市定住民と遊牧民のそれぞれが残した遺構の比較研究が可能となった。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

サウジアラビア北西部では、新石器時代から鉄器時代、古代にかけてのさまざまな時代の遺跡において、サウジアラビア、ヨーロッパ諸国の調査隊が考古学調査を進めており、遊牧民社会・文化の成立過程および都市の成立・発展過程に関するデータが蓄積されつつあるが、本研究がめざす、地形環境の微細分析による都市の食糧生産基盤および都市定住民と遊牧民の関係に焦点をあてた研究は皆無に近い。アラビア半島の内陸乾燥域においても都市間をつなぐ人の移動や物流のネットワークが存在したことは各地の遺跡の調査によって明らかになってきているが、そこに新石器時代から段階的に発展してきた遊牧民社会がどのように関わっているのか、遊牧民社会が展開する乾燥域に都市がどのような背景のもとで形成され維持されたのか、本質的な問いかけとその解明は本共同研究の極めて独創的なアプローチであり、令和 3・4 年度の事業で達成した研究成果は今後の研究を先導するものとして評価できる。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

相手国側代表者マルタ・ルチアーニは、グレイヤ遺跡の発掘調査を長期計画のもとで進めており、すでにサウジアラビア北西部有数の先史・古代都市であるこの遺跡について多くの知見とデータを得ている。一方、日本国側代表者・上杉が所属する金沢大学では、藤井純夫特任教授率いる調査隊がグレイヤ遺跡の後背丘陵地帯に展開するワディ・グバイ遺跡において、同じく長期的に調査を進めてきている。

本事業はこの両者のデータ・知見を統合する新たな研究である。令和 3・4 年度にルチアーニと共同で行ったグレイヤ遺跡の測量調査は、これまでのデータを地形環境を含めた新たなプラットフォームに位置づける点で、この統合的研究の基盤をなすものとなった。また、相互の学術交流を基点として、サウジアラビア北西部の内陸乾燥域に展開した都市定住民と遊牧民の関係からなる先史・古代社会の解明に向けた、より総合的な調査・研究を展開していく上でも極めて重要な意味をもつ。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

伝統的な遊牧民社会が展開した地域として知られるアラビア半島の内陸乾燥域では、歴史的にみると、都市と遊牧民社会が複雑な関係をもって推移してきた。その関係史の端緒は本事業が研究対象とする青銅器時代に

あり、本研究の成果によって都市社会と遊牧民社会の関係史について極めて重要な知見が得られた。それはアラビア半島の歴史理解を大きく変える可能性をもっており、翻って現代のアラビア半島の社会を理解する上でも重要な知見を提供するものである。それはアラビア半島外部に暮らす我々にとってのみならず、遊牧民というアイデンティティを強く保持する内部の人々の歴史認識にとっても大きな意味をもつものである。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

日本国側参加者のうち若手研究者である覚張隆史と三木健裕については、時間的制約のため現地調査に参加することは叶わなかったが、日本国側代表者・上杉彰紀が現地調査で得たデータの分析に参加した。アラビア半島北西部における今後の調査・研究において基礎となる研究データの分析を共有できたことは、両名の今後の研究においても重要な意味をもつものである。

また、本事業に関わる、相手国側代表者ルチアーニが実施するグレイヤ遺跡の発掘調査には、ウィーン大学の学生が 10 名程度、サウジアラビア文化遺産局の若手職員数名が参加しているが、彼ら彼女らにとっても、本事業はさまざまな意味をもっている。本事業がめざす統合的研究は、研究者の初期段階にいる学生の研究意欲を高めるとともに、研究にかかわる問題意識をより高次のものへと導くものである。令和 3・4 年度の現地調査においても、日本国側代表者・上杉が彼らと日々交流し議論を重ねたが、そうした交流は間接的にせよ本事業がもつ極めて重要な価値と考える。

(6)将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

アラビア半島内陸乾燥域における都市社会と遊牧民社会の総合的研究は、まだ端緒についたばかりであり、本事業が対象とするグレイヤ遺跡周辺の総合研究もまた長期計画のもとで推進していく必要がある。相手国側代表者マルタ・ルチアーニとは、本事業終了後も共同研究を継続することで同意を得ている。本事業が目標とする内陸乾燥域における都市の食糧基盤、都市民と遊牧民の関係史の解明には、地形・水利環境の分析だけでなく、古代 DNA 分析や同位体分析、都市民が残した諸々の物質文化要素(日常生活道具や稀少価値財、技術など)の多角的分析が不可欠であり、より高次の統合的・多次元の研究の推進・継続が不可欠である。本事業において実施する研究は、金沢大学とウィーン大学の長期的共同研究の出発点に位置づけることができる。

(7)その他(上記(2)～(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

例:大学間協定の締結、他事業への展開、受賞など

特にありません。